

栗本薫

文藝春秋



黒船屋の女

栗本薰

文藝春秋

黒船屋の女

黒船屋の女

昭和五十七年十二月十日 第一刷

定価 九五〇円

著者 栗本 薫

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(〇三)二六五・一二二一

印刷 凸版印刷

製本所 大口製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

黒船屋の女／目次

第一章 夢二の女

9

第二章 喪服の女

64

第三章 幻の女

119

第四章 炎の女

175

装画 竹久夢二「黒船屋」より

（著作権者 竹久不二彦氏
所蔵者 長田幹雄氏）

装幀 花村 広

黒船屋の女

「オール讀物」昭和五十七年五月号～八月号連載

女の甲高い悲鳴が柔かな春の夜をひききいて闇の中にひびきわたっていった。

苦痛というより、恐怖——そして衝撃、狂乱のひびきを伝える悲鳴。

すでに、深更をすぎている。クラクションも、夜まわりの拍子木もとくに途絶え、あたりは住宅街の静寂である。

闇の中で、つよい沈丁花の匂いが漂った。

悲鳴は一声だけで途切れた。たまたまその悲鳴の、出所にわりあい近くいた男ひとりだけが、ぶつかりとどえた悲鳴のあとに、奇妙な音をきいた。

「ウ、ウ、ウ、ウ」

口を何かにふさがれてでもいるような、断続的な呻き声——人のというよりも、獣か何かの声に似ている。

そして、何かを、高いところから激しくひきずりおとして床にぶつけたような、がしゃん、がちゃん、という音、ガラスのこわれるひびき。

そしてまた。

「誰か——誰か来てえ」

それは、いまにも息も絶えなばかりの、切れ切れなかばそい声だった。

「待ってろ。どこだ？」

その声の中には、男をふるい起たせる何かがあった。かよわく、助けを求めている女を、すべてを投げ出して危険の渦中へ、男に救いにゆかせる、そんな、ふしぎなほど男を動かす力があつた。

沈丁花の匂いの中に立っていたその男もまた、その声の、たよりない、かばそいひびきに耳をそばだてたのだ。

「今、行くぞ」

叫ぶなり、男は走り出した。

まだ、若い。大股に走る力強い足は、沈丁花のむせかえる匂いの中をかけぬけ、まっすぐに、彼を、その声のありかへとみちびいた。

いまどき、こんな、と思うくらい、古びて風雅な、明治時代めいた洋館。

沈丁花の花が足もとに散り、踏みしだかれた枝がいよいよつよい香を放った。男は生垣をおどりこえ、悲鳴のきこえて来たと思われる奥の一室へ突進し、窓をけ破ろうとし——

そして、ちょっと、とまどったようにその動きをとめた。

ぼうっと室内からの小さなあかりがうかびあがらせているその窓は、美しい、古びたステインド・グラスだった。

(ちッ)

舌打ちして、男は、そのガラスを拳で叩き破り、中におどりこんだ。悲鳴——というよりも、

もう喘ぎに近いそれは、まだその中からもれていたのだ。

「ああ——誰か、誰か来て……助けてえ……」

「どうしたんだ！」

ステインド・グラスの碎け散る音、新たな悲鳴、そして、自分自身の叫びの余韻の中で——

彼は、呆然と、わが目を疑い、そこに見たものがうつつなのかと疑いながら立ちつくしていた。拳からだらだらと流れおちる血も気づかずそのとびこんだところが、まるで、突然時代の壁をとびこえて、大正浪漫の中へでも入ってしまったかのような、古びて、優雅な、きゃしゃな洋間であることも、目には入らなかった。

それどころか。

床の上に、ころがっている、異様な二つのモノにさえ、彼はまるっきり目が行きさえしなかったのだ。

彼は——

ただ、彼女を見ていた。

胸に、あわいとき色の長襦袢をかきよせ、なまめいた白いやせた肩をあらわに、怯えた大きな眼を見ひらいてこの新たな闖入者を見上げている女。

ぬめりを帯びた黒髪、ひらいた小さなくちびる、白鳥をおもわせる長く優雅な頸、小さな胸——

(エウレカ)

この、血まみれの錯乱と狂気の夜の底で、あまりにも場ちがいな、そのことば、そのおもい、いつなんどき、どの人間を不意打にとらえおそいかかるのか、まったく知ろうすべもないそのひとことが、いま、沈丁花の匂いをかきけすなまぐさい血の匂いのさなか、ゆつくりと、彼のくち

びるにのぼってくるのだ。

(エウレカ。エウレカ。……)

彼女だったのだ。

夜は歩みをとめ、時はその意味を失い——彼の前で、彼女はただ一枚のあやしい肖像画の中に凍り——

寺島次郎はその夜、探しつづけていた、生ける《夢二の女》に出逢った。

第一章 夢二の女

1

「何ですって？」

若い刑事が、ばかに威丈高な大声になって机を叩いた。

「もう一度、云ってみて下さい」

「何回でも云いますよ」

寺島次郎は不貞腐れて云った。

「たとえあなた方にどうおかしくきこえたところで、それが本当なんだからしょうがない。僕は、散歩していたんです。のぞきをやってたわけでも、泥棒が本職なわけでもない。それが僕の日課なんだから仕方がない」

「夜中の三時半に散歩？」

刑事の、気短かそうな顔が歪んでいる。

「スケッチブックをもつて？」

「画材をさがしてね。僕は、日中は寝ているんだ。毎日夕方六時に起きて、寝るのは朝方七時つとこです。別に、僕だけがそういう生活してるわけじゃないでしょう。僕の友人の作家やなん

「かにも、けっこうそういう連中がいる」

「ああ……」

「刑事は疑わしげに彼をにらんだ。」

「じゃ、あんたは画家か？」

「自分じゃ、そのつもりなんですがね」

寺島はむっとしたように云った。長髪、サングラス、黒いセーターと汚いジーンズ。さほど、ユニークなイメージというわけでもないし、ただ、それをして、ありきたりな画学生、画家の卵とすんなり見られるには、彼の場合、いくぶん年の行きすぎているきらいのあることだけが、特徴と云えるかもしれない。

「スケッチブックを見せてもらいますよ」

「刑事はそれをくっていたが、

「変った絵だな。少し、気味が悪いものを書くんですね」

「ばかにしたように云った。」

「それにまあ、貴方本人が描いた、という保証はないわけで——」

「失敬だな。ここで一枚、何か描いてみせましょうか」

「いや、まあ——それより、その貴方の日課を、どなたか証言してくれる人がおありでしたら……」

「僕の友達なら誰しも、僕がそういう人間で、世の俗人どもとはかみあわぬ暮らし方をしているって事は知ってますよ。僕は奇人です通ってますからね。じゃ、こいつと——こいつがいいかな」

彼は紙に、二、三人の名と電話番号を書いてさし出した。刑事はまたじろりと彼をみた。

「確かめさして貰いますよ。また後はど呼ぶまでそっちの待合室で」

「わかりましたよ」

寺島は立ち上り、ぶらぶらと出てゆこうとして、ひと言捨台詞すてざいりふを叩きつけた。

「まるで容疑者扱いだね。僕あ警察に協力したつもりでいたんだが、今後は、悲鳴を夜中にきいても一切かかりあいにならんことにするよ」

「その方がよさそうですね。ことに、昨今の東京ではね」

刑事ふたりはわざわざ顔を上げようとしなかった。かれらは既に、電話の上にかがみこんでいた。

寺島次郎は何となく、面白くない、それでいて妙に興奮した不安定な気分のまま、室の外へ出た。警察署の廊下はすすけてうす暗く、窓に金網がはってある。壁にはりつけたポスターや標語が目につく。

「あ……」

北川紫乃だった。彼女は、隣の室から、婦警につきそわれるようにして出てくるところで、彼をみて、青ざめた顔をそむけるようにした。長い髪が束ねられもせず背に垂れて乱れている。少女のようだ。細い身体を頼りなく、黒っぽい塩沢が包んでいる。手当り次第にそのへんのものをまとって来たように、帯の色も柄もあっていない。

あわい臙脂えんじに白で麻の葉を出した半衿をかけているのだけがくつきり目をひいた。

彼女は婦警に何かささやき、待合室へ入っていった。待合室といっても、この一件のためにひと部屋あけた応接室らしかった。急いで、寺島はそのあとに続いた。

「その——」

何と云つてよいかわからない。ただ惑乱と、そしてあやしいときめきだけがある。三十六にもなった鑿の立つた独身男に、こんなうぶいまじがあるかと思う。女は、昨夜のほの灯りの下では年齢というものをたぬ夢の国の女のように見えた。無慈悲な昼の光が、四十五、六——下手をしたら、五十に手が届くかもしれぬと教える。それでも、彼女は、少女めいて見える。

「その……」

このたびは、というのか。大変でしたね、というのか。

床にころがっていた物体の一つの、彼女は内妻だ。千藤雄吉。わりあい、高名な、大きな画廊の持主だった。紫乃とは年が、十ちかく、はなれている。家が寝静まった二時すぎに、もう一つの物体になりはてたやせて、汚い服を着た浮浪者じみた男が、千藤家に押し入った。夫婦を、それも床の上で寺島が見た刺身庖丁でおどし、書斎につれてゆき、金庫をあけさせて金を出させた。金をポケットにねじ込むと、男は千藤の腹を機械的に突き刺しておいて、女を犯した。女が犯されている最中に、刺された良人は庖丁をひろい、妻を犯している男の背を後ろから刺して殺した。その良人も、病院に運ばれる途中で、出血多量で死んだ。残酷だが、ありふれた事件であり、すでに、はじまったときに終わっている事件でもあった。犯され、夫を殺された女が一人生き残った。それさえ、運のよかつた方かもしれない。ただ、真夜中の散歩者が悲鳴をきいてステインド・グラスを叩き割り、とび込んで来た、というのだけが、ありふれた強盗と正当防衛の物語の余計者だった。

「その」

寺島は、包帯の巻かれた拳を見つめた。ぺこりと頭を下げた。

「すみませんでした」

「ええ？」

驚いたように女が目を見はった。ひとえ臉の、どこか睡^{ねむ}そうな、うるんだような目だ。

「その——せっかくのステンドグラスを、割っちゃって」

「まあ……」

女のくちびるが奇妙なふうによがみ、あやうく柔かい微笑をかたちづくる寸前になってひきつった。

「いえ——」

かぼそい、耳をそば立てていなければききとれぬような声で、女は云った。

「あんなものは、いつでも——直せますから……」

ばかなことを云ったと彼は気づいた。女にしてみればそれどころではなかった。

「すみません。ばか云っちゃって。その——動転してて。ご主人のことは本当に……」

「かわりのないかたにまでご迷惑をかけて——」

青い顔で、とがった肩をかすかにふるわせながら女は云った。それから、強いて笑顔をみせようとした。

「でも——画家の方でいらっしゃるそうですね……ふしぎな——奇遇で……」

「画家ってほどのものじゃないんです。イラストレーター——というより、何でもやのくず絵かきですよ」

寺島は女の肩を抱いて慰めてやりたい、ふしぎなつきあがる衝動に耐えた。

「とても、お宅の画廊で個展を開いて頂けるような、『画家』なんてもんじゃないんです」

「そんなこと……」

女は首をかしげた。青ざめ、化粧もしておらず、やつれて、打ちのめされているくせに凄いうになまめいて——いや、その打ちのめされた風情のゆえにこそ、いっそうあやしく男に不埒な情欲をも、抱きよせて底い守りたい心をもかきたてる、そんな艶が細い姿の上にある。

（鏡花の女、夢二の女——胸でも病んでいるような……あれは、何といったっけ？ 雨にうたれる秋海棠の風情——）

寺島の目がその女の長く美しいうなじと、そこに乱れかかるほつれ毛に吸いよせられた。

扉が開いた。寺島はようやく、ずっと扉ののぞき穴か、壁にでもかくされていたのぞき窓から見張られていたこと、同じ室にわざと二人だけにしたのが、二人がすでに知りあいであるかどうか、ようすを見るための策略であったことに気づいた。

しかしそれに憤りを感じているいとまはなかった。

「寺島さん——でしたね」

少し年配の部長刑事が愛想よく寄って来た。

「どうもいろいろと失礼なことを申し上げまして——ご友人に電話で伺ってすっかり、いろいろかわった暮らし方をされている理由や生活信条のお話がわかりました。いや、別に疑ったとかそういうことではないのですが、何分こういう事件ですので——」

女はじっとソファにうなだれている。

被虐の美、ということばが彼に思い浮かんだ。この女が、押し入って来た暴漢に苛まれるところを、想像すまいとつとめればつとめるほど、頭の芯がかき乱される。それを払いのけようと、別のことを考えた。髪は、いまは垂らして娘のようだが、むろんこの長い頸とうなじの持主は、それを高々と結いあげてべっこうの櫛のひとつもさしてもよいだろう。顔立も姿もいまだき珍し